

梶井基次郎

闇の絵巻





# 闇の絵巻



最近東京を騒がした有名な強盗が捕まって語ったところによると、彼は何も見えない闇の中でも、一本の棒さえあれば何里でも走ることが出来るという。その棒を身体の前へ突き出し突き出しして、畑でもなんでも盲滅法に走るのだそうである。

私はこの記事を新聞で読んだとき、そぞろに爽快な戦慄を禁じることが出来なかつた。

闇！ そのなかではわれわれは何を見ることが出来な

い。より深い暗黒が、いつも絶えない波動で刻々と周囲に迫って来る。こんななかでは思考することさえ出来ない。何が在るかわからないところへ、どうして踏み込んでゆくことが出来よう。勿論われわれは摺足すりあしでもして進むほかはないだろう。しかしそれは苦渋や不安や恐怖の感情で一ぱいになった一歩だ。その一歩を敢然と踏み出すためには、われわれは悪魔を呼ばなければならぬだろう。裸足はだしで薊あざみを踏んづける！ その絶望への情熱がなくてはならないのである。

闇のなかでは、しかし、若しわれわれがそうした意志

を捨ててしまふなら、なんとという深い安堵あんどがわれわれを包んでくれるだろう。この感情を思い浮かべるためには、われわれが都会で経験する停電を思い出してみればいい。停電して部屋が真暗になってしまふと、われわれは最初なんともいえない不快な気持になる。しかし一寸ちよつと気を変えて呑気のんきでいてやれと思うと同時に、その暗闇は電燈の下では味わうことの出来ない爽やかな安息に変化してしまふ。

深い闇のなかで味わうこの安息は一体なにを意味しているのだろう。今は誰の眼からも隠れてしまった——今

は巨大な闇と一如になつてしまつた——それがこの感情なのだろうか。

私はながい間ある山間の療養地に暮していた。私は其処そこで闇を愛することを覚えた。昼間は金毛の兎が遊んでいるように見える谿向たにここの枯萱山かれかややまが、夜になると黒ぐろとした畏怖に變つた。昼間氣のつかなくつた樹木が異形いぎような姿を空に現わした。夜の外出には提灯ちようちんを持ってゆかなければならない。——月夜というものは提灯の要いらない夜ということの意味するのだ。——こうした発見かいていは都会から不意に山間へ行つたものの闇を知る第一階かい梯



である。

私は好んで闇のなかへ出かけた。溪ぎわの大きな椎しいの木の下に立って遠い街道の孤独の電燈を眺めた。深い闇のなかから遠い小さな光を跳めるほど感傷的なものはないだろう。私はその光がはるばるやって来て、闇のなかの私の着物をほのかに染めているのを知った。またあるところでは溪の闇へ向って一心に石を投げた。闇のなかには一本の柚ゆずの木があったのである。石が葉を分けて蔓々かつかつと崖がけへ当たった。ひとしきりすると闇のなかからは芳烈な柚の匂いが立騰のぼって来た。

こうしたことは療養地の身を噛むかような孤独と切離せるものではない。あるときは岬みさきの港町へゆく自動車に乗って、わざと薄暮の峠へ私自身を遺棄された。深い溪谷が闇のなかへ沈むのを見た。夜が更けて来るにしたがつて黒い山山の尾根が古い地球の骨のように見えて来た。彼等は私のいるのも知らないで話し出した。

「おい。何時いつまで俺達はこんなことをしていなきやらないんだ」

私はその療養地の一本の闇の街道を今も新しい印象で思い出す。それは溪の下流にあった一軒の旅館から上流

の私の旅館まで帰って来る道であつた。溪に沿つて道は少し上りになつてゐる。三四町もあつたであらうか。その間には極く稀まれにしか電燈がついていなかった。今でもその数が数えられるように思う位だ。最初の電燈は旅館から街道へ出たところにあつた。夏はそれに虫がたくさん集つて来ていた。一匹の青蛙がいつもそこにいた。電燈の真下の電柱にいつもびったりと身をつけているのである。暫らく見ていると、その青蛙はきまつたように後足を変なふうに曲げて、背中を搔かく模まねをした。電燈から落ちて来る小虫がひつつくのかもしれない。いかにも

五月蠅うるさそうにそれをやるのである。私はよくそれを眺めて立留たどっていた。いつも夜更けでいかにも静かな眺めであった。

しばらく行くと橋がある。その上に立って溪の上流の方を眺めると、黒ぐろとした山が空の正面に立ち塞ふさがっていた。その中腹に一箇の電燈がついていて、その光がなんとなしに恐怖を呼び起した。バーンとシンバルを叩たたいたような感じである。私はその橋を渡るたびに私の眼がいつもなんとなくそれを見るのを避けたがるのを感じていた。

下流の方を眺めると、溪が瀬をなして轟々と激ごうごうしていた。瀬の色は闇のなかでも白い。それはまた尻しっ尾ぽのようになくなって下流の闇のなかへ消えてゆくのである。

溪の岸には杉林のなかに炭焼小屋があつて、白い煙が切り立った山の闇を匍はい登つていた。その煙は時として街道の上へ重苦しく流れて来た。だから街道は日によつてはその樹脂臭い匂いや、また日によつては馬力ばりきの通つた昼間の匂いを残していたりするのだつた。

橋を渡ると道は溪に沿つてのぼつてゆく。左は溪の崖。右は山の崖。行手に白い電燈がついている。それはある

旅館の裏門で、それまでの真直ぐな道である。この闇のなかでは何も考えない。それは行手の白い電燈と道のほんの僅かの勾配こうばいのためである。これは肉体に課せられた仕事を意味している。目ざす白い電燈のところまでゆきつくと、いつも私は息切れがして往来の上で立留った。呼吸困難。これはじつとしていなければいけないのである。用事もないのに夜更けの道に立ってぼんやり畑を眺めているような風をしている。しばらくするとまた歩き出す。

街道はそこから右へ曲っている。溪沿いに大きな椎しいの

木がある。その木の闇は至って巨大だ。その下に立って見上げると、深い大きな洞窟どうくつのように見える。梟ふくろうの聲がその奥にしていることがある。道の傍らには小さな字あざがあつて、そこから射して来る光が、道の上に押被かぶさつた竹藪たけやぶを白く光らせている。竹というものは樹木のなかで最も光に感じ易い。山のなかの所どころに簇むれ立っている竹藪。彼等は闇のなかでもそのありかをほの白く光らせる。

そこを過ぎると道は切り立った崖を曲つて、突如ひろびろとした展望のなかへ出る。眼界というものがこうも

人の心を変えてしまおうものだろうか。そこへ来ると私はいつも今が今まで私の心を占めていた煮え切らない考えを振るい落としてしまったように感じるのだ。私の心には新しい決意が生れて来る。秘ひめやかな情熱が静かに私を満たして来る。

この闇の風景は単純な力強い構成を持っている。左手には溪の向うを夜空を劃くぎって爬虫はちゆうの背のような尾根が蜿蜒えんえんと匍へっている。黒ぐろとした杉林がパノラマのように廻って私の行手を深い闇で包んでしまっている。その前景のなかへ、右手からも杉山が傾きかかる。この山に



沿って街道がゆく。行手は如何いかんともすることの出来ない  
闇である。この闇へ達するまでの距離は百米メートル余りもあ  
ろうか。その途中にたった一軒だけ人家があつて、  
楓かえでのような木が幻燈のように光を浴びている。大きな闇の  
風景のなかでただそこだけがこんもり明るい。街道もそ  
の前では少し明るくなっている。しかし前方の闇はその  
ためになお一層暗くなり街道を呑みこんでしまう。

ある夜のこと、私は私の前を私と同じように提灯なし  
で歩いてゆく一人の男があるのに気がついた。それは突  
然その家の前の明るみのなかへ姿を現わしたのだった。

男は明るみを背にしてだんだん闇のなかへはいって行ってしまった。私はそれを一種異様な感動を持って眺めていた。それは、あらわに云って見れば、「自分もしばらくすればあの男のように闇のなかへ消えてゆくのだ。誰かがここに立って見ていればやはりあんな風に消えてゆくのであろう」という感動なのであったが、消えてゆく男の姿はそんなにも感情的であった。

その家の前を過ぎると、道は溪に沿った杉林にさしかかる。右手は切り立った崖である。それが闇のなかである。なんとという暗い道だろう。そこは月夜でも暗い。歩

くにしたがって暗さが増してゆく。不安が高まって来る。それがある極点にまで達しようとするとき、突如ぞおつという音が足下から起る。それは杉林の切れ目だ。ちようど真下に当る瀬の音がにわかすきにその切れ目から押寄せて来るのだ。その音は凄まじい。気持にはある混乱が起って来る。大工とか左官とかそういった連中が溪のなかで不可思議な酒盛りをしていて、その高笑いがワツハツハ、ワツハツハときこえて来るような気がすることがある。心が振ねじ切れそうになる。するとその途端、道の行手にパツと一箇の電燈が見える。闇はそこで終ったのだ。

もうそこからは私の部屋は近い。電燈の見えるところが崖の曲角で、そこを曲れば直ぐ私の旅館だ。電燈を見ながらゆく道は心易い。私は最後の安堵とともにその道を歩いてゆく。しかし霧の夜がある。霧にかすんでしまつて電燈が遠くに見える。行つても行つてもそこまで行きつけないような不思議な気持になるのだ。いつもの安堵が消えてしまう。遠い遠い気持になる。

闇の風景はいつ見ても変らない。私はこの道を何度とということなく歩いた。いつも同じ空想を繰返した。印象が心に刻みつけられてしまった。街道の闇、闇よりも濃

い樹木の闇の姿はいまも私の眼に残っている。それを思  
い浮かべるたびに、私は今いる都会のどこへ行っても電  
燈の光の流れている夜を薄っ汚なく思わないではいられ  
ないのである。

——一九三〇年九月——



日本文学電子図書館

---

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷

---



日本文学電子図書館